

## 第五章 西南の役

### 一、西郷隆盛叛す

明治十年二月、前の近衛都督非役陸軍大將西郷隆盛九州に叛す。是より先き、明治六年征韓問題に關して、廟議二派に分れ、西郷隆盛は憤然官を辭して郷里鹿兒島に還つた。陸軍少將桐野利秋、同僚原國幹等皆辭して之に従ひ、私學校を起して、専ら郷黨青年の教育に従事した。明治五、六年の頃は、維新の鴻業畧ぼ成ると共に、政治上の勢力に、一大消長を生じたる時にて、志を中央に失ひ、滿々たる覇氣を懷いて野に潜める者は、常に西郷一派に限らなかつた。佐賀の亂、熊本の亂、萩の亂等、皆夫等の失意の士が鬱結せる滿腔の不平を洩らさんとしたものに外ならぬ。西郷の擧兵は、是等の徒とは稍や其趣を異にし事は決して西郷の志ではなかつたが、桐野以下私學校の幹部並に其生徒に擁せられて、遂に起たざる可からざるガメに陥り、遂に慄慄決死の薩摩華人一萬五千を率ゐ、政府に詰問の筋ありと稱して、鹿兒島を進發し、其の途上熊本城を包圍した。

二月十九日、隆盛以下の官を被奪し、有栖川熾仁親王を征討總督となし、陸軍中將山縣有朋、海軍中將川村純義を征討參軍となして、之を討伐せしめらる。

征討の宣言に曰く、  
鹿兒島暴徒、擅ニ兵器ヲ携ヘ熊本縣下ニ亂入、國憲ヲ憚ラス、叛跡顯然ニ付、征討被仰出候。條此旨相達候事。

征討旅團は左の如く編成せられ、續々として戦地に送られた。蓋し正面軍は博多に上陸して、往々往々賊軍を破つて南下し、別働旅團は八代灣日奈久附近に上陸し、北上して賊の背面を衝き、兩面より齊進して、熊本城の圍みを解くのが、第一期作戰の主眼であつた。

正面軍

衝背軍

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| 征討第一旅團 (長、少將野津鎮雄) | 別働第一旅團 (長、少將高島綱之助)  |
| 同 第二旅團 (長、少將三好重臣) | 別働第二旅團 (長、少將山田 顯義)  |
| 同 第三旅團 (長、少將三浦梧樓) | 別働第三旅團 (長、少將川路 利良)  |
| 同 第四旅團 (長、少將大山 巖) | 別働第四旅團 (長、代理大佐黒川通軌) |
- 熊本籠城軍(同鎮臺司令官、少將 谷 干 城)

## 二、第二大隊(部)の出征並作戰

三月二十日 當聯隊の第二大隊第三中隊及び同第四中隊に對して、出征の命あり。當時は充員等の制度の無かつた時なれば、出征といふも極めて簡單にて、兩中隊は翌二十一日鹽釜より乗船して出征の途に就き、二十九日神戸に上陸して、即日大阪に到り、別働第四旅團に編入せられた。翌三十日 天皇陛下(當時京都)大阪に行幸、出征諸隊を親閲あらせられ、將校同相當官に拜調を賜ふ。將卒一同感激す。

出征中隊の幹部は左の如くであつた。

第三中隊 長、大尉青木秀三、附、中尉小梁川敬治、同、少尉試補杉浦幸治、檜崎小次郎

第四中隊 長、中尉横濱慶昌、附、中尉林親季、同、少尉試補船本南水、名倉孝記

別働第四旅團は四月一日大阪を出發して、同日神戸港を出帆、海路肥後國八代に航して、同月六日宇土郡網田村に上陸し、爾來吾第三、第四中隊は八代、古鏡、弓田山、人吉、大畑口、小川、野上橋等の各戦團に参加し、毎戦奮闘して克く其任務を全うし、且つ東北健

兒の名聲を發揚したるが、就中大畑口及び小川村に於ける戦闘は、此戦役中吾出征部隊の遭遇せる最大激戦にして、聯隊歴史上に特筆すべき價値がある。

大畑口の戦闘 六月一日吾第三中隊(當時第二十五)及び第四中隊(當時第二十六)は、大畑口附近

に於ける敵陣地の正面に向つて、攻撃を開始するや、敵は天險に堅固なる堡壘を築いて之

に據り、防戦頗る努め、攻撃隊は奮戦午後に至りたるも、終に抜くこと能はず。是日終日

風雨激しく、戦闘最も激烈を極め、名倉少尉以下八名の死傷者を生ずるに至つた。此夜は

賊と近く相對峙し、至嚴なる警戒を加へつ、一夜を徹し、翌十二日拂曉を待つて、攻撃

を再興し、赤池村方向より猛進して、神宮司山に在る我砲兵隊の掩護射撃の下に、添田村

の敵陣に迫り、同地の守兵を撃攘し、勢に乗じて敵の本陣地たる大畑口に肉薄した。敵兵

殊死して防戦したるも、我が軍の猛撃に堪へず、遂に其の守地を棄て、飯野越、加久藤越

吉田越の三道より敗走し去つた。

此日の戦闘に吾兩中隊の損害左の如し

△戦死 下士卒 五 △負傷 下士卒 一八

小川村附近の激戦 七月二十二日第三(長、代理)中隊協力して、天堤越の哨線を

守つてゐた。此の哨線は小川村の賊衝に當るが故に、本道及び左右の山嶺に十餘壘を列構して、嚴重に守備しつゝあつたが、午前四時賊の一隊は、小川本道より進み來り、稻荷社近傍に達するや、銃火を開いて、我が正面の哨所を射撃し、以て戦鬪を挑んだ。因て我も亦銃火を開いて之に應じたるに、一隊の賊兵は更に稻荷間道及び田無瀬間道より進んで、右翼第三中隊の守線に逼り、同時に又他の一隊は、樵路を潜行して、俄然我が左翼第四中隊の守線を襲ひ、白刃を揮ひ吶喊して、其の壘内に所り入つた。此の拔刀突撃は薩軍の最も得意と爲せる戦法にて、謂ゆる敵の決死隊、慄悍勇猛當る可からず。當時拔刀隊の夜襲と聞くや、其の兵力の多寡をも探るに遑なく、直ちに守地を棄て、退却した隊すらあつた位で、此の拔刀隊の爲には、官軍何れも頗る苦しめられたものである。東北の健兒、固より拔刀隊の名を聞いた位にて潰走するやうな見苦しい戦争は爲ない、林中隊長以下或は拔刀を以て、或は銃剣を以て之に應じ、死力を竭して接戦格闘したるも、衆寡敵せず。遺憾ながら左翼の五壘を棄て、第六壘、第七壘に據りて惡戦す。敵の將校らしき者陣頭に立ち、紅白の旗を揮ひて兵を指揮し、火を稻荷の祠及び我が哨舎に放ちて焼き、勢ひ益々猖獗、第六壘も亦危からんとす。適ま附屬一個中隊の來援あり、協力して第五壘を復し、次

で四斤山砲一門の増加を得て、志氣彌々昂り、之を第八壘に据付けて、二百五十米突の近距離より散弾を敵の頭上に浴びせたるより、敵兵不意を撃たれて狼狽し、隊伍を亂して、第一壘に潰走した。我が軍機を逸せず全線前進に移り、彈藥を惜まず猛射する、敵火を冒して、奮進し、終に銃劍突撃を強行して敵兵を驅逐し、午後一時曩に失へる左翼の堡壘全部を恢復した。

時に旅團參謀中村中佐(遠重)一小隊を率ゐて戦線に來り、賊の敗走するを見て曰く、

「宜しく此機に乗じて、小川の賊巢を覆すべし」

と、第四中隊をして左翼舊線を守らしめ、第三中隊の一部を右翼山上に留め、自ら殘餘の諸隊を率ゐて追撃した。青木大尉中隊の主力を率ゐて、追撃軍の先鋒たり。青木隊は右翼より、原大尉隊は正面より敵の壘に迫り、大砲を連發して小川村内を轟撃すと雖も、賊勢頑強にして容易に抜く能はず、對戦稍久しきに互る。次で林中尉は第四中隊の半隊を率ゐて之に増加し、敵弾を受けて負傷せるに拘らず、剛勇にして屈せず、抜刀を翳して士卒を激勵し、自ら陣頭に立ちて敵壘に躍り入らんとしたるも、壘高うして入る可からず、忽ち敵兵の狙撃する所となり、飛丸腹部を洞して、壯烈なる戦死を遂げ、攻撃隊の氣色少し

(36)

く萎んで見えたる所に、第四中隊の名倉少尉、二分隊を率ゐて増援し、帯ぶる所の號旗を司令河北少佐に托して堅き決意を示し、手兵を提げて敵壘に呐喊し、奮戦して其一壘を奪取した。敵勢はより力抜け、竟に諸壘を棄て、越野尻に走り、黄昏小川村を占領した。然れども我が兵、悉く疲れて、此の地形不詳の地點を守るべからず、火を放つて全村を焼き、夜半兵を收めて舊守線に歸り、天堤越の哨所に入つた。

是日天堤越に來襲せる敵兵は、佐土原一、二番中隊、志布志七番中隊及穂北農兵隊等より成る六百餘の混成隊にして、其の指揮官は鮫島一であつたと云ふ。此戦闘に於ける兩中隊の損害

△戦死 中隊長代理中尉林親和、卒四。

△負傷 少尉試補岩淵、繁隆 下士卒三十一

### 三、第一大隊の出征並作戰

是より先き、庄内地方不穩の情あり。命に由り聯隊長山路中佐第一大隊を率ゐて、鎮撫の爲山形に出張した。軍隊の出動を聞いて、騷擾忽ち熄み、三月二十五日仙臺の屯營に

歸還するや、同二十八日出京の命を受け、三十日屯營を發して陸路東京に行軍し、四月十二日到着、同地に衛戍すること一ヶ月有半、六月一日更に命に由りて東京出發、大阪に至りて、新たに編成せられたる新選旅團(長、東伏見少將宮)に編入せられ、出征の目的を以て海路鹿兒島に航し、七月二十八日福知山に上陸、同三十日都の城に入り、爾後高鍋、長井の各戦闘に參與し、九月七日再び鹿兒島に入りて、米倉の守備隊に加はつた。然し新選旅團の編成は、既に此戦役の末期に屬せるを以て、華々しき戦闘に參與すること無くして終つた。

出征第一大隊の幹部は左の如くであつた。

第一大隊 長勤務大尉岳村靜彦、副官中尉石岡武真、軍醫副森岡愿益、軍吏補里見守行

第一中隊 長大尉 附中尉田村胤祚、少尉藤村忠誠、熊澤安定

第二中隊 長大尉 附中尉原義則、同廣中勝重、少尉試補安田重朝、平野

參郎

第三中隊 長大尉神保正十、附中尉大島久誠、少尉試補廣津潤藏、同小宮山武記

第四中隊 長大尉新保正、附中尉船坂信賴、少尉試補星野圓太郎、同中原熊。

尙ほ聯隊長山中佐は、別働第四旅團參謀として出征し、左記將校は何れも遊撃歩兵大隊

( 38 )

1767



に轉出の上出征した。

聯隊副官大尉中村政定、第二中隊長大尉山中信義、第二大隊副官中尉會根良一、中隊附  
中尉原則義、同大島久正、同倉山唯永、同船坂信賴、少尉井上東一、少尉試補竹内林八

#### 四、賊徒平定及凱旋

九月十九日城山の合圍全く成り、各指揮官相會して攻撃の部署を定め、二十四日未明を以て  
總攻撃の期と決定した。各旅團の選抜突撃隊は左の如くである。

第一旅團攻撃隊	指揮官少佐	大島久直
第二旅團 同	同	吉田道時
第三旅團 同	同	川村景明
第四旅團 同	同	大沼涉
別働第一旅團 同	同	坂井重季
同 第二旅團 同	同	河野通行
新選旅團 同	同	立見尙文
熊本鎮臺 同	同	山根信成
攻撃隊兵力約十一中隊、將校以下千三百餘名		

爾餘の諸隊は山麓に在りて、包圍の任に就いた。少尉井上東一は若干部隊を率ゐて、新選旅團の選抜攻撃隊に屬し、西郷隆盛自盡せるの後、殘敵尙ほ岩崎谷口の壘に據りて、殊死拒戦するに際し、少尉は一分隊を指揮して、岩崎谷の山麓より之を猛射し、第四旅團の攻撃隊と協力して、賊壘に突入し、桐野利秋以下數十名を殲して殊勳を樹てた。

九月二十七日、征討旅團の編成を解かれ、第二大隊第三及第四中隊は、十月十七日鹿兒島を發して、十一月十六日仙臺に凱旋し、第一大隊は十二月十八日鹿兒島を發して、翌十一年一月五日仙臺に凱旋した。

十一月十六日、即ち仙臺に凱旋の日を以て、畏くも天皇陛下侍從武官堀川康隆を仙臺鎮臺に差遣はされ、左記優渥なる勅語と共に、聯隊長以下將卒一同に酒饌料を下賜せられ、尙ほ慰勞休暇を賜つたのである。

勅語

汝等奮ニ鹿兒島暴徒ノ軍ニ從ヒ各部下ト共ニ奮戰劇闘累月艱苦ヲ經、終ニ平定ノ功ヲ奏

ス

朕深ク其職ヲ盡セルヲ嘉ス

(40)

1769

因テ侍從堀川康隆ヲ遣シ其勞ヲ慰シ汝等以下諸兵へ酒饌ヲ賜フ。願ふに出征玆に十閱月、此間各地の戦闘に参加して、克く其任務を全うし、敵兵の用うべきを實證すると共に、國民皆兵の義を鞏固にし、且つ無上の光榮を荷うて凱旋し、大いに我が軍旗の名譽を發揚したのである。

此役吾聯隊の死傷者次の如し

△戦 死 陸軍中尉林規季、少尉小宮山武範、少尉竹内林八、下士卒二十八名

△負 傷 陸軍大尉守木芳三、下士卒五十四名

外に病歿將校陸軍少尉廣津潤祐。同北新盛